

[資料] 地政学と海の戦略 : マハン提督と海軍力

その他のタイトル	Geopolitique et strategie naval (L'Amiral Mahan et la puissance maritime)
著者	Alain Guillerm, 大山 正史
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	29
号	1
ページ	225-244
発行年	1997-05-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/00022484

資 料

地政学と海の戦略*
——マハン提督と海軍力——

アラン ギレム**

Geopolitique et stratégie navale
(L'Amiral Mahan et la puissance maritime)

Alain GUILLERM

Abstract

Our research is to understand the sea from two points of view: naval strategy and military marine power. Most international trade occurring by the sea is supported by mercantile marine and military marine power. We explain historically and structurally the relationship between the power and the sea, the sea and the region, the mercantile marine power and the military marine power in reference to previous research of the times and regions. In our study, Mahan's geopolitics plays an important role. The skeleton of his geopolitics regards military marine power as a decisive factor for territory and sovereignty. He thought the role of maritime provinces important. We compare the Navy power of the epoch of Louis XIV with that of Japan of World War II. In the last part, we explain the meanings of modern Mahanism.

Key words : geopolitics, maritime power, military marine power, Mahan, Mackinder, Mahanism, the Japanese Navy power, Louis XIV and the French Navy power.

抄 録

この研究は、海と海軍力の観点から海洋を理解することである。現代においても交易の大半は海洋であり、貿易船団と海軍が大きな支柱になっている。様々な時代、地方の研究を通じて、権力と海洋、海洋と海に面した地方、貿易船団と海軍の関係を歴史的構造的に説明していく。そこではマハンの海洋の地政学理論が重要な役割を果たす。その骨子は海軍力が領土主権の決定的要因とみなすことである。そして海洋に面した地方の役割を重要とみる。このような観点からフランスのルイ14世の艦隊と戦前の日本の海軍力の比較検討を行う。さらに現代のマハン主義の意味について説明する。

キーワード：地政学、海洋国家、海軍力、マハン、マッキングダー、マハン主義、日本海軍、ルイ14世とフランス海軍

* 1997年6月2日の社会学部学術講演会の講演内容に加筆したものであり、翻訳は当日の通訳をつとめた大山正史氏（吉備国際大学社会学部）によるものである。原文を翻訳の後につけている。

** アラン・ギレム氏は1997年度の関西大学外国人招聘研究者であり、現在、フランス国立科学研究所（Centre National de la Recherche Scientifique）の政治・権力・組織研究部門所属の上級研究員及び、国立社会科学高等研究院（Ecole des Hautes Etudes en Science Sociales）講師。

この研究は海洋を二つの違った角度から理解しようと努めています。海の戦略は国際関係を分析する手段として有効ですし、海軍力は空間を組織する力として理解されます。実際、海洋は諸国の富の支柱であり富を創造してきました。現代でも交易の4分の3が海洋を使用しています。このため貿易船団と海軍が必要となります。この海軍は平時においても抑止力として働いています。

いずれの場合も船団は港、基地、そして後背地を必要としています。首都機能の理想としてはこの二つの機能を同時に持っていることです。19世紀にはニューヨークがこれに該当し、現代ではロサンゼルスとサンディエゴがこれに該当します。

この作業仮説を基にして色々な時代、地方の研究を通じ、権力と海洋、海洋と海に面した地方、貿易船団と海軍の関係を支えている構造を明らかにしていきたいと存じます。長い期間にわたる研究はこの分野では不可欠なのです。

世界銀行はここ10年間の中華人民共和国を含めた東アジアの経済成長率は年率7.3%と発表しました。世界中のどの地域においても、これほど短期間に国の富を増大させたことはありません。このペースだと西暦2000年には世界生産量の半分を占めることとなります。アジア、太平洋地域の経済成長は海洋部門において特に顕著です。これは数千年来、諸国民の重要部門でした。

海洋部門の世界ランキングでアジア太平洋地域はトップを独占しています。日本の海の軍事力は総トン数でフランス海軍をまさに凌駕しようとしています。日本と韓国は船舶の受注額で全世界の56%を占めています。中国と日本は漁獲量で1位と2位を占めています。西暦2000年には世界の大都市は極東をはじめ港町となっているでしょう。しかし、この地域には10を越える紛争地域があります。海軍力増強の激しい競争がこの危険を裏づけています。

これに加えアジアの造船能力と軍事力はこの力のため海洋のOPECのような存在になり、西洋の制御不能になるかもしれません。湾岸戦争を中国、日本、韓国に起こすわけにはいきません。コンテナ船の建造に関しては5000ボックス収容の大型船を日本は100隻、韓国は73隻受注しています。西洋ではドイツのみが問題の重要性を意識し83隻のコンテナ船を受注していますが、2000ボックス収容の中型船です。軍用船舶に関しては台湾のエバーグリーン、中国のコスコ、日本が主導権を握っています。

1) 地政学の方法論

ドイツ、ババロア軍の将軍で地理の教授でもあったラッツェル(1844—1904)の創造以来、地政学は幾つかの学派に分裂しました。主な理論家に大陸権力説のマッキンダー(1861—1947)、海洋権力説のマハン(1840—1914)、予言的理論家のハウスホーファーがいます。ハウスホーファーの理論は南北関係に立脚していて、ある程度実現しています。彼はモンロー主義の信奉者であり、それを全世界の大地域に応用しようとしていました。まずアングロサクソン人がラテンア

メリカを支配し、これに続いてドイツ人が息を吹き込んだヨーロッパがアフリカを領有し、汎ロシアがアフガニスタン、インドを支配します。これはほとんど成功間近でした。そして最後に中国からオーストラリアに至るアジア共栄圏が日本をリーダーとして成立します。こうなれば各共栄圏の間に恒久的平和がもたらされると彼はしています。

これに対しマッキンダーは大陸国家ロシアが全ユーラシア大陸を併合すると考えましたが、1943年に考えを変え、将来 NATO となって結実する戦略を構築しました。

2) マハンと海洋国家理論 (1840—1914)

マハンは地政学の最重要人物ですが、1840年にアメリカ海軍士官学校のウェストポイントに生まれ、彼の父も海軍士官でした。彼はニューポートの海軍大学校の教授となり1885年以来学長を勤めました。1902年から1914年まで彼は海軍委員会の議長として、テオドール・ルーズベルト大統領の下でアメリカ海軍の実質的発展に寄与しました。巡洋艦数隻から近代的戦艦を有する大艦隊へ急速に発展したのです。マハンの理論によればアングロサクソンの帝国主義が全世界で勝利するはずであり、まずパナマに進出し領有することによりカリブ海を地中海のような内海にしてしまい、これを足場にイギリスの助けを借り、アメリカは全世界を支配することになります。この理論は1918年に実行に移され、1922年のワシントン条約で完成します。

国家間の領土紛争は当事国の海洋支配能力によって決定されます。マハンの理論は海軍力を領土主権の決定的要因とみなしています。彼の理論は軍事的勝因を歴史的に分析して構成したものです。もちろん戦争の各要因は種種の結合が可能です。いくつかの原因は過去のものとして捨て去られるべきかもしれません。しかし過去も現在も第一の要因は海軍力のようです。もちろん現代では海軍力に船舶だけではなく軍事衛星と地上基地から出動するオライオン P3C のような海洋偵察機も加えなければなりません。

次にマハンは沿岸地帯の重要性と日本やイギリスのような島国、半島部、湾岸、河口、内海等の果たす重要な役割を理論的に確定しました。地中海の島とジブラルタルという戦略的重要地点を基地として獲得し、イギリスは商業的にも軍事的にも世界史で重要な役割を果たしてきた地中海を制圧できたのです。現代では世界地図で領土紛争の起きている島や湾岸をみればこの重要性を理解できるでしょう。イスラム諸国では1990年から1991年の湾岸戦争、現在では南沙諸島があります。

第三にマハンは商業船舶と原材料補給路の保護を強調しています。これはアングロサクソン人は第二次世界大戦時に実行しましたが日本人は無関心でした。現代では帝国主義の時代より海上輸送路は重要となっています。飛行機輸送では十分ではなく、重量物の輸送にはやはり海上輸送が不可欠です。海上輸送路の防衛は最重要課題であり、戦争勃発時には敵の輸送路を分断することは至上命令となります。これはニコバルから日本への巨大な石油輸送のことであると気づきのことでしょう。

マハンは商業的関係を最も広い意味で理解しています。彼はイギリス帝国の例を考察し、この商業的関係の故に世界最大の商業国家となったと分析しています。

マハンは必ずしも海戦至上主義者ではありません。海戦は陸戦の勝利を目指すものであり、逆は真ではないと承知しています。しかし彼の分析によれば、ナポレオンの失脚を決定したのは、ワーテルローの戦いではなくトラファルガー海戦であったと論証しています。マハンは次のように書いています。「大陸軍の決して見ることのない、大型帆船が相戦い、世界の支配者が決定したのである。」

地政学者は内部抗争や道徳性を除外した科学的な定理を導き出そうとしています。国際関係は力関係と歴史的、地理的定理によってのみ決定されるのです。

大部分の地政学者は“客観的地理学”を拠り所としていますが、マハンは地理学より歴史学のうちにより多くの真理があると考えます。クラウゼビッツと異なり彼は歴史学が理論的、戦略的な中心的学問であると考えました。

このためマハンは近代的海軍と過去の海軍の比較を戦略的観点から考察できたのです。これは17世紀、18世紀の海軍研究として結実します。『海軍力の歴史への影響、1660年—1783年』がその本です。この主著において過去の大海軍との比較から、彼はアメリカ海軍の教条となっている「海洋国家」とその定理を述べています。

ここでフランスのルイ14世の時代と1937年から1945年における日本をマハンの見地から比較検討し、マハンの定理が応用可能かどうか検証してみたい。

3) ルイ14世の艦隊と1937年—1945年の日本海軍の比較研究

どちらの場合も大陸帝国が存在しました。17世紀のヨーロッパではゲルマン民族の神聖ローマ帝国であり、20世紀のアジアにおいては清帝国滅亡後の中国です。どちらも衰退期にあり分裂していました。神聖ローマ帝国はオーストリア帝国によって統一された状態ではなく、中国は蒋介石政権の下で不安定でした。

ルイ14世は神聖ローマ帝国からアルザス地方とフランドル地方の一部を強奪し、日本は満州を占領しました。しかし、フランスと日本の最終目的は帝国の全部を領有することでした。このためフランスはヨーロッパで孤立し、日本も1937年の中国侵攻時には世界とりわけアングロサクソン諸国から孤立します。日本は北京、続いて南京を蒋介石に返還すべきだったでしょう。同様にルイ14世も神聖ローマ帝国に手を出すべきではなかったでしょう。ストラスブール占領はルイ14世に対する全面戦争を誘発しましたし、廬溝橋事件は日本に対する全世界の非難を呼びました。フランスは神聖ローマ帝国がトルコと戦う時に助け、日本は蒋介石が軍閥や毛沢東主義者と戦う手助けをしたほうがよかったです。しかし、蒋介石は近衛文麿による反共主義、汎アジア主義を軸とした“新秩序”案を一蹴しました。実際、近衛は中国への領土返還を確約しなかったのです。もっと穏健な中国政策をとっていたなら、フランスが神聖ローマ帝国

と同盟できたかもしれないように、日本も中国と同盟できていたかもしれませんが。どちらの場合もアングロサクソン人を敵にまわさずにすんだかもしれず、日本は満州領有を認められていたかもしれないのです。穏健な地上政策を実行しながら国境に敵がいなとすれば、海軍に専心できたかもしれません。ルイ14世はトルコを打ち破ることによってヨーロッパに君臨し、日本は統一された独立中国を創出することによって、アジアの盟主になれたかもしれません。この“大戦略”によってイギリスとアメリカを中立化できたかもしれないのです。

1940年にヒトラーがフランスとオランダを打ち破った後、日本はビシー政権のおかげで仏領インドシナで権益と基地を獲得しました。日本はインドネシアにおいてもオランダと交渉し、国際連盟の許可の下で日本の委任統治領にできたかもしれません。インドネシアは第一次産品、たとえば石油の宝庫です。こうなれば日本はドイツと軍事同盟を結ぶ必要はなかったかもしれません。ナチ体制やファシスト体制は日本軍国主義とはかなり違った体制だったのです。第一次世界大戦の時、日本は民主主義国家側にたち、1918年に戦闘を交えることなく中国におけるドイツの権益を継承できました。1940年においてもイギリス領マレーシアとアメリカ領フィリピンを攻撃せず、インドシナとインドネシアを継承できたかもしれません。この外交政策をとれば、ルーズベルトは平和主義で孤立主義的だったアメリカの選挙民を戦争に駆り立てることは非常に困難だったに違いありません。万一、ルーズベルトがインドネシアを守るため宣戦を布告したとしても、戦争は空海戦に限定され、中国は無関係だったことでしょう。同じくルイ14世も神聖ローマ皇帝と同盟していれば、資金と兵力をイギリス海軍に集中できたことでしょう。

1660年にフランスは世界を近代化する手段を持ち合わせていたのです。歴史家はこの事実あまり注目してきませんでした。コルベール父子という偉大な大臣の忠告にルイ14世は耳を貸さず、彼の一生の夢だった偉大な王になる鍵はヨーロッパにはなく海洋にあるという事実を理解できなかったのです。彼は新しい「百年戦争」であったこの鍵をイギリスに委ねてしまいます。彼の無理解のためフランスは新世界に君臨しそこね、フランスは世界最強国になれませんでした。その結果、アングロ・サクソン人が覇権を握ったのです。最大の戦略地点はライン川沿いとかオランダにはなく、全海洋に君臨すべくイギリス海軍を打破することにあつたからです。

1690年にフランス海軍は絶頂期にありました。テムズ川河口のベブジエにおいてトルビル提督はイギリス艦隊に勝利を収めますが、完全に絶滅するまでには至りませんでした。この生き残ったイギリス海軍が、マハンの概念によれば事実上の艦隊を構成し、トルビルはロンドンの造船所を焼き討ちにするのを断念しました。

おなじくパールハーバーにおいても、南雲提督は航空司令官の要請にもかかわらず、燃料補給に寄港していた2隻の航空母艦に対する第二次爆撃を行いませんでした。この2隻の航空母艦を撃沈していれば、8隻の旧式戦艦の全部を沈めるより有益だったことでしょう。

2年後の1692年に小コルベール・ド・セニユレは死亡し、ルイ14世はトルビルにあきれた命

命を下します。「イギリス艦隊を数のいかに関わらず、どこにしようが撃沈せよ。」この間にオランダはイギリスと同盟を結んでおり、フランス地中海艦隊は大西洋沿岸のブレストに停泊中の主力艦隊に合流する余裕がありませんでした。マハンの戦力集中の原則はフランスによって適用されなかったのです。イギリスと最短距離のコランタン半島にあるラ・ウーグの海戦で2対1の劣勢ながら、12時間にわたりフランス艦隊は1隻も離脱せず戦火を交えました。しかし、翌日コランタン海流に逆行し、サン・マロかブレストの母港に避難する余力はもはやありませんでした。マハンはフランス艦隊について次のように書いています。「どの艦隊もこの時のフランス艦隊ほどの高い軍人精神を発揮したことはなかった。」この敗戦は決定的なものとはいええず、失ったのと同数の艦隊が造船されました。しかし、海洋戦略を実行に移すべきコルベール父子がもはや存在しませんでした。陸軍ロビーが海軍ロビーより強力になり海賊船が古典的艦隊に取って代わります。

同じようにミッドウェー海戦においても戦力の集中が欠けていました。もし2隻の航空母艦が4隻の重量級航空母艦に加わっていたなら、3隻のアメリカ航空母艦を撃沈できたことでしょう。このとき1隻は遠い離島にあり、1隻は戦艦「大和」の護衛についていました。

ヨーロッパにおいてはラ・ウーグ海戦のずっと後にスペイン継承戦争が勃発します。全ヨーロッパがアメリカに巨大帝国を有しているスペイン王の地位にルイ15世の息子がつくのを望まなかったのです。しかし結局、彼はフェリペ5世としてスペイン王の地位につくことになりました。1704年にイギリスはツールーズ伯と戦闘を交える前にジブラルタルを占領しますが、そのときイギリス艦隊はマラガでフランス艦隊によって苦しめられていました。しかし、ツールーズ伯は24隻のガレー船の内1隻も敵の戦闘能力を試すため出動させませんでした。このときイギリス船は火薬も弾丸もなく、非常に痛んだ状態だったのです。ツールーズ伯はなにも決断せずチャンスを逸してしまい、ジブラルタルは結局補強され補給物資も十分となり難攻不落の城塞になってしまいます。

フランスは海戦を回避し、1707年にはイギリス海軍とピエモンテ軍が海陸両面からツーロン軍港に攻撃をしかけます。同年にフランスは2つの戦闘に勝利します。ツーロン軍港の占領失敗とアマンザの戦闘の勝利です。これによってフェリペ5世はスペイン王座につきます。しかし、史上初めてイギリス海軍が地中海に常駐するようになったのです。ヨーロッパ全体を相手にした戦争はフランスを疲弊させ、数多くの侵攻と地上戦の敗北を味わいます。しかし1711年にドゲ・トルアン提督がリオ・デ・ジャネイロを攻略しイギリス保護領を奪ってしまいます。このためイギリスは1713年に休戦を決断し、この海戦の勝利は歴史を変えてしまいます。同年に全面講和が締結し、フランスは国土と植民地の大部分を保全します。これにはケベック州を護る大要塞であるルイスブルが含まれ、ルイジアナ州ではデトロイトから1719年に建設されたニューオーリンズに至るまで植民地は拡大します。ルイ14世の治世の結果、フランスはライン河流域と北東ではヴェーバンの要塞群によって形成される国境線にまで拡大します。海洋植

民地部門においては、イギリス艦隊の増強にも関わらず広大なフランス・スペイン植民地はブルボン王家の家族の絆によって同盟関係に入ります。

フランスとイギリスの植民地は次の2つに分類されます。

- 1) アメリカ：沿岸州はイギリスに所属し150万人の入植者で構成しています。これに対しフランスは内陸部の広大な植民地を領有しています。これはケベック州首都のサン・ローラン州、五大湖、ミシシッピ川流域を含みますが植民者は10万人しかいなくてアメリカ・インディアンと同盟を結びます。たとえばケベック州フランス軍4000人の内アメリカ・インディアンは1800人を占めていました。
- 2) インド：人口密集地域のため奴隷も植民者もいませんが、貿易会社と後にマハラジャと呼ばれる地方豪族が手を結びます。インドは天然資源の宝庫でした。

しかしフランスの海洋政策はルイ14世、ルイ15世、フランス革命と一貫性を欠き、このため全世界でイギリスの支配権確立を許し、19世紀にはイギリスが覇権国の地位につきます。これは第一次世界大戦後にもう一つのアングロ・サクソン国であるアメリカ合衆国が後継者の地位につくまで続きます。

地政学的見地からみれば、日本が30年代にアメリカ合衆国と衝突しようとしていることは明白でした。ふつうこの戦争はこれまでの考察からも解るように海戦になるはずでした。日本は1940年代に蒋介石と和解し、また仏領インドシナとインドネシアを得ることで満足するべきでした。この手段を講じていれば海軍増強に専念できたのです。支那事変は航空母艦建造の二倍の出費を必要としたのです。そしてマレーシアとフィリピンを領有していたアングロ・サクソンが日本のインドネシア領有に我慢できないのであれば、宣戦布告するのは彼らの側だったはずで、これはアメリカ世論に非常に不利な立場です。

4) マハンの時代のマハン主義と現代のマハン主義

帆船艦隊は1860年代に砲弾と装甲を施した蒸気船艦隊に取って代わりました。

日本海海戦はこの新式艦隊間の最初の大海戦でした。マハン日本の戦勝を予想し、これをアメリカ合衆国への挑戦と考えました。1900年に彼は『アジア問題とアジアの国際政治へ及ぼす役割』という本を出版します。

マハンはフィッシャー卿による最初の近代的戦艦の建造を目撃します。これはより高速だが守備力に劣る駆逐艦を伴っています。この巨大艦隊は日本海海戦から学んでできたものです。これは戦艦「大和」にその最高の姿をみることになります。

D : 戦艦

CB : 駆逐艦

1917年				
日本	イギリス	ドイツ	アメリカ合衆国	フランス
?	28D, 10CB	16D, 5CB	17D	5D
1940年				
10D	15D	2CB	15D	6D

各国艦隊の数字はドイツ艦隊壊滅と日本海軍出現後の数字です。この日本の努力は特筆に値します。日本はアングロ・サクソン5、日本3、フランス2というワシントン条約を遵守しています。

上の数でアメリカが戦艦の数でイギリス海軍と同数であることに気づきます。しかしアメリカ・日本・イギリスは航空母艦を同数保有しています。これは戦艦に取って代わることになる船舶で、マハンの時代には存在しませんでした。彼が生存していれば重要性を認識していたに相違ありません。事実マハンによれば各時代には一つの旗艦「海洋の王」しか存在し得ないのです。ルイ14世、ルイ16世、ネルソンの大海戦の教訓は装甲艦、戦艦、航空母艦の海戦にも応用可能なのです。船舶は変遷しますが原則は同一なのです。

- 1) 戦力の集中
- 2) 敵の組織力の破壊
- 3) 人口の集中した後背地をもった工業化した基地の創造

マハンはドイツ学派・ロシア学派の基となった「若い学派」には批判的でした。その理由は小駆逐艦隊及び潜水艦は駆逐艦に沈められてしまうからです。これは航空母艦を潜水艦から護衛するのにも有効です。これに対しマハンは大和型の2隻の戦艦を賞賛していたことでしょう。また信濃型も航空母艦であつたら同様の賞賛を得ていたことでしょう。マハンの理論によれば、この組み合わせは良質のパイロットと対空・対潜駆逐艦に護衛されていれば海洋の王となっていたことでしょう。

マハンによればアメリカ合衆国は紛争を起こすことなくイギリスの後継者となるはずでしたが、この予言は実現し日本の大国化を抑制することが可能になりました。

パンアメリカン航空会社の路線は当初マイアミ・キューバ線だけでしたが、次にカリブ海に拡大し、ついにはパナマ運河の開通によって太平洋に艦隊を派遣することが可能になりました。

しかし太平洋におけるアメリカ帝国主義はまだ基地を保有しておらず、パンアメリカン航空は30年代に次のニュー・フロンティアに向けて進出します。「チャイナ・クリッパー」と呼ばれる飛行機による太平洋の制覇です。ロサンジェルスと香港を終着駅とし、ハワイのパールハーバー、ミッドウェー、ウェーク、グアム、マニラを経由するものでした。この線は将来の太平洋戦争のラインと一致しています。

マハンはアメリカ合衆国をイギリス・日本と同様の島として認識していました。陸に関してはメキシコを抑えておけば十分と考えていたのです。中国における日本陸軍の介入時に、アメリカには陸軍ロビーは存在しませんでした。その証拠にアメリカ士官のうちでマハンの理論に最も忠実だったマッカーサーが海戦の最高責任者であり、事実上ニミッツ提督を指揮していました。

アングロ・サクソン人がマハンの理論を信奉し、フランス人がマハンの理論と「若い学派」をカステックス提督の下で統合する一方、日本人は海軍戦略を創造しませんでした、封建時代のサムライ精神しか持ち合わせていなかったのです。

日本が蒙古来襲を打ち破ったのは海岸であり、海洋ではありませんでした。東郷大元帥がロシア艦隊を打ち破ったのは対馬海峡であり、シンガポールまで海戦を仕掛けにいったわけではありません。ロシア艦隊は太平洋沿岸からウラジオストックへ向かう危険もあったのです。一つの真理を示しておきます。日本海軍は陸軍を支援するためのものであり、敵の組織力を壊滅させるためのものではなかったのです。

第二次世界大戦もこの事実を例証しています。日本海軍は上陸作戦を支援するか、アメリカ軍の上陸を阻止するかどちらかに参戦しているのです。

結論として、現代では商船団および海軍の増強によって戦後体制によく対応し、日本は帝国主義時代には実現しえなかった目標をほぼ実現したように思われます。こうして日本はマハン主義者になったのです。(大山 正史 訳)

Geopolitique et stratégie navale
(L'Amiral Mahan et la puissance maritime)

Alain GUILLERM

Nos recherches appréhendent la mer sous les deux angles : la stratégie navale comme analyseur des relations internationales et la puissance maritime comme organisateur d'espace. En effet la mer est à la fois le support et le créateur de la "richesse des nations" (les échanges se font encore aux trois quarts par ses voies), d'où la nécessité d'une marine de commerce et d'une marine de guerre qui, même en temps de paix, assure un rôle dissuasif.

Dans les deux cas, les marines ont besoin de ports ou de bases, et d'hinterlands ou d'arrière-pays. L'idéal pour une métropole est que ces deux commodités coïncident : tel fut le cas de New York au XIX^{ème} siècle comme de nos jours, celui du bipôle Los Angeles-San Diego.

Sur la base de cette hypothèse de travail, notre méthodologie est l'étude des traits structurels qui régissent les rapports entre le pouvoir et la mer, la mer et les provinces maritimes, la marine marchande et la marine de guerre, à travers différentes époques (car l'étude de la longue durée est, dans ce domaine, essentielle), et différentes régions.

La Banque Mondiale annonce que dans les dix ans à venir, le taux de croissance moyen en Asie Orientale, Chine Populaire incluse, sera de 7,3% par an. Jamais aucune région du monde n'a accru sa richesse en si peu de temps et l'on prévoit qu'elle pourrait générer en l'an 2000, la moitié du produit mondial brut. La croissance des pays de l'Asie-Pacifique est particulièrement notable dans le domaine de la mer, élément fondamental depuis des millénaires, entre les populations de la région.

Au palmarès mondial des activités maritimes, l'Asie Pacifique rafle les premières places. La flotte de combat japonaise est sur le point de dépasser *en tonnage* celle de la France; Japonais et Coréens détiennent 56% du carnet de commandes mondial de la construction navale; la Chine et le Japon sont les premiers producteurs mondiaux de denrées halieutiques; en l'an 2000, les plus grandes villes seront les ports, à commencer par ceux d'Extrême orient. Mais également plus d'une dizaine de points de conflits existent au tournant de ce siècle dans cette région. La course aux armements particulièrement aigre en ce qui concerne les flottes de combat, souligne ce danger.

En outre chantiers et armements asiatiques pourraient, vu leur puissance, créer une

sorte d' "OPEP maritime" qui ne serait pas contrôlable par l'Occident : on ne peut mener une "Guerre du Golfe" contre la Chine, le Japon (ou même la Corée qui aurait l'appui automatique de ses deux puissants voisins). En effet pour la construction des porte-conteneurs, les Japonais et les Coréens ont respectivement en commande 100 et 73 bateaux d'environ 5000 "boîtes". Seule en Occident la RFA a pris conscience du problème..

elle a 83 porte-conteneurs en chantier mais plus petits, environ 2000 boîtes. Pour l'armement les géants d'Evergreen (Taïwan), de COSCO (Chine) ou japonais sont maîtres du marché.

1) La géopolitique comme instrument méthodologique

Depuis sa création par l'Allemand Ratzel, général bavarois et professeur de géographie (1844-1904), la géopolitique est devenue une science divisée en écoles. Les principales sont celles de MacKinder (1861-1947), théoricien du "land-power", de son rival A. T. Mahan (1840-1914), chantre du "sea-power" et celle de la conception visionnaire de Haushofer, conception, axée sur les rapports Nord-Sud, qui s'est réalisée depuis. Grand admirateur de la doctrine de Monroe, Haushofer voulait l'élargir aux grandes "régions" du monde entier; l'Amérique latine dominée par les Anglo-Saxons était pour lui un modèle entraînant l'Europe, dynamisée par l'Allemagne à posséder l'Afrique, la "Pan-Russia" à dominer l'Afghanistan et l'Inde - ce qui a bien failli se passer- et enfin une "aire de co-prospérité" asiatique, de la Chine à l'Australie, avec le Japon comme leader.. Il pensait par ces découpages maintenir une paix définitive entre les Grands.

Au contraire, MacKinder pensait que l'Heartland (la Russie) annexerait toute l'Eurasie, mais dès 1943, il changea d'avis et privilégia dans son schéma la future OTAN.

2) Mahan et la théorie de la puissance maritime (1840-début 1914)

Mahan, le plus important des géopoliticiens, est né en 1840, à West Point où son père était, lui aussi, un officier de marine, carrière qu'il embrassa. Il devint professeur au "Naval War College" de Newport dont il fut le président à partir de 1885. De 1902 à 1914, il dirigea la Commission des Affaires navales; sous la présidence de Théodore Roosevelt, il contribua au développement effectif de l'US Navy qui, d'une poignée de croiseurs, évolua rapidement vers une flotte de cuirassés modernes.

Pour Mahan, l'impérialisme anglo-saxon devait triompher partout et d'abord,

braudélien avant la lettre, en se créant une Méditerranée dans les Caraïbes avec le percement et l'occupation de Panama, à partir de laquelle, avec l'appui anglais, les USA domineraient le monde, ce qui fut réalisé dès 1918 et 1922, avec le Traité de Washington.

Les contestations territoriales entre Etats dépendent de leurs capacités de contrôle de la mer. La doctrine de Mahan met l'accent sur la puissance maritime comme agent de la puissance territoriale. Cette doctrine est basée sur l'analyse historique des conditions de la victoire. Naturellement l'utilisation de différents "théâtres de guerre" se combine de différentes façons; la priorité temporaire de l'un d'eux donne la clef des grands problèmes stratégiques contemporains comme passés. Mais cette priorité semble être, encore et toujours, de nos jours la puissance maritime incluant non seulement les bateaux mais aussi les satellites et les avions de patrouilles maritimes basés à terre (comme l'Orion PC3).

Ensuite, Mahan établit le fait de l'importance des zones côtières et du rôle essentiel joué par les îles (comme le Japon et la Grande Bretagne par exemple), les isthmes et les péninsules, les golfes et les embouchures de rivière, les mers intérieures, toutes ces places propices au blocage, à l'installation de bases et arsenaux, etc.. Par l'acquisition d'îles et d'autres bases importantes stratégiquement comme Gibraltar (ou Panama pour les USA), la Grande Bretagne put maintenir un contrôle sur la Méditerranée, qui a joué un rôle essentiel dans l'Histoire mondiale (comme les mers de Chine), sur la plan commercial comme militaire. De nos jours, il suffit de regarder sur une carte les îles et les golfes disputés (dans les pays islamiques, guerre du Golfe de 1990-91 et maintenant les îles Spratlys entre autres)

Troisièmement, Mahan insiste sur la protection des liens maritimes commerciaux et de l'approvisionnement en matières premières, au cours d'une guerre organisés en convois (ce que firent les Anglo Saxons mais non les Japonais pendant la Seconde Guerre mondiale). Les routes maritimes sont encore plus importantes de nos jours qu'au temps des grands empires coloniaux. L'avion ne peut suppléer, les lourds tonnages appartiennent aux bateaux. La défense des routes maritimes est essentielle, et cela signifie que couper les routes de l'ennemi est une priorité en cas d'hostilités ouvertes. Nous faisons allusion ici à l'énorme circulation du pétrole de Nicobar au Japon.

Mahan entend les relations commerciales au sens le plus large. Ainsi il considère l'exemple, déjà ancien, de la Grande Bretagne et de son empire maritime qui pour cette raison même, devint la plus grande puissance commerciale du monde.

Mahan n'est pas un propagandiste de la guerre navale pour elle-même. Il sait que la guerre sur mer vise finalement une victoire terrestre, le contraire n'étant pas vrai. Mais son analyse montre que par exemple, ce qui a ruiné finalement Napoléon n'est pas Waterloo mais Trafalgar. Ainsi écrit-il: "Ce furent ces grands vaisseaux battus des vents que la Grande Armée ne vit jamais, qui se dressèrent entre elle et la domination du monde." Les géopoliticiens tiraient des constantes, scientifiques selon eux, et dénuées de conflits internes comme de moralité, les relations internationales n'étant déterminées que par la force et les constantes de l'histoire et de la géographie.

Mais si la plupart d'entre eux s'appuient effectivement sur une "géographie objective", Mahan pense qu'il y a plus d'invariants dans l'histoire que dans la géographie. Pour lui, l'Histoire est directement théorique, directement stratégie à la différence de Clausewitz. C'est pourquoi A. T. Mahan fut le seul à établir une comparaison d'un point de vue stratégique entre la marine moderne et la marine du temps passé, à propos de la grande époque de la Marine aux XVII^{ème} XVIII^{ème} siècles, ("The Influence of sea power upon History, 1660-1783"). Dans cet ouvrage majeur, et grâce à ce type de comparaison avec une grande marine du passé, Mahan a tiré ce qui est encore la doctrine officielle de l'US Navy, Celle du "sea power" avec ses grands principes invariants.

Nous proposons ici une comparaison, un scénario, entre l'époque de Louis XIV en France et celle du Japon de 1937 à 45, vue du point de vue mahanien pour montrer comment peuvent s'appliquer ces invariants..

3) Comparaisons entre les guerres navales de Louis XIV et la Marine japonaise de 1937 à 45

Dans les deux cas, il y avait un empire continental: en Europe au XVII^{ème} siècle, le Saint Empire Romain germanique, et en Asie, au vingtième siècle, l'ex-empire chinois. Tous deux étaient alors décadents et divisés, l'empire allemand n'était pas unifié par le roi d'Autriche, et de même la Chine n'était pas stable sous Tchang Kaiï-Tchek.

Louis XIV prit à l'Empire allemand l'Alsace et une partie des Flandres comme le Japon prit la Mandchourie. Mais la visée de la France et du Japon était, dans les deux cas, de s'emparer de la totalité des empires. Pour cette raison, Louis s'isola de l'Europe,

et le Japon, au moment de l'invasion de la Chine en 1937, fut isolé du monde, spécialement le monde anglo-saxon. Le Japon au Jehol aurait du jouer le jeu de donner Pékin à Tchang Kaï-Tchek et après, Nankin. De même Louis XIV n'aurait pas du se jeter sur le Saint Empire; ainsi la prise de Strasbourg qui provoqua une guerre générale contre lui fut l'équivalent de l'incident du pont Marco Polo qui provoqua une protestation générale contre le Japon.

La France aurait mieux fait d'aider le Saint Empire contre les Turcs et le Japon d'aider Tchang Kaï-Tchek contre les seigneurs de la guerre et les Maoïstes. Mais Tchang Kaï Tchek rejeta le projet du "Nouvel Ordre" en Asie Orientale proclamé par le premier Ministre japonais Konoé (3 now 38) sur le base de l'anticommunisme et du panasiatisme. En effet Konoe ne lui donna pas assez de garanties (restitution des provinces du Jehol, Chahar et Hopeï et indépendance ou condominium de la Mandchourie). En menant des politiques terrestres modérées, le Japon aurait pu s'allier à la Chine comme la France au Saint Empire. Dans les deux cas ils auraient ainsi évité l'hostilité des Anglo-Saxons et le Japon se faire pardonner la prise de la Mandchourie.

En menant une politique terrestre modérée, on peut ainsi donner la priorité à la Marine, les ennemis n'étant pas présents aux frontières. Louis aurait pu devenir le maitre de l'Europe en détruisant la Turquie et le Japon le maitre de l'Asie s'il avait créé et unifié une Chine indépendante. Cette "Grande Stratégie" aurait permis à ces pays de neutraliser l'Angleterre et les Etats Unis.

Après la chute de la France et de la Hollande en 1940, écrasés par Hitler, le Japon avait, grâce à l'administration vichiste, des facilités et des bases en Indochine française. Il aurait pu agir de même avec les Hollandais en Indonésie qui aurait pu devenir un mandat japonais donné par la SDN. (Société des Nations) L'Indonésie est une énorme réserve de matières premières, par exemple de pétrole. Dans ce cas, le Japon n'aurait eu aucune raison de s'allier avec l'Allemagne (les systèmes nazi et fasciste étaient très différents du militarisme japonais). Comme pendant la première guerre mondiale, le Japon aurait pu être du côté des démocraties, ce qui lui valut en 1918 d'hériter des établissements allemands en Chine sans combat. En 1940, il aurait pu hériter de l'Indochine et de l'Indonésie sans attaquer la Malaisie anglaise et les Philippines US. Dans ce cas de figure diplomatique, il était très difficile à Roosevelt d'imposer la guerre à son électorat qui était pacifiste et isolationniste.

Néanmoins, si Roosevelt avait déclaré la guerre à cause de l'Indonésie, la guerre aurait été aéronavale et n'aurait pas frappé en Chine. De même Louis, allié avec

l'empereur d'Allemagne, aurait pu employer son argent et ses forces contre la Royal Navy (Marine anglaise)

En 1660, la France avait entre ses mains le moyen de faire le monde moderne, les historiens n'ont pas assez insisté sur ce fait. En dépit des avis de ses deux grands ministres, les Colbert père et fils, Louis XIV commit la grande faute de ne pas comprendre que la clef de la grandeur - qu'il recherchait tant- n'était pas en Europe mais était sur les océans. Il laissa l'Angleterre prendre possession de la clef de ce conflit qui fut une nouvelle "Guerre de Cent ans". Son incompréhension lui fit perdre la chance de régner sur un nouveau monde et de fait, Louis échoua la faire de la France la plus grande puissance du monde et laissa aux Anglo-Saxons le pouvoir de l'être. Car le défi n'était pas alors le long du Rhin ou en Hollande, mais de combattre la Royal Navy pour avoir le pouvoir sur toutes les mers.

En 1690, la Marine française était à son apogée; à Béziers, près de l'embouchure de la Tamise, l'amiral Tourville détruisit une flotte anglaise mais ne réussit pas à l'anéantir complètement.

Ces survivants d'une flotte anglaise constituèrent une "fleet in being" selon le concept de Mahan et dissuadèrent Tourville d'aller brûler les chantiers navals de Londres.

Ainsi à Pearl Harbor, l'amiral Nagumo, au grand regret du chef de opérations aériennes japonaises, n'exécuta-t-il pas un second raid pour couler les deux porte-avions qui étaient forcés de venir faire le plein de mazout. Couler ces deux porte-avions aurait été plus utile que détruire une flotte entière de huit cuirassés démodés.

Deux ans après en 1692, Colbert de Seignelay, le fils, mourut et le roi donna un ordre stupide à Tourville: "Coulez mes ennemis quel que soit leur nombre et où qu'ils se trouvent" Mais entretemps, la Hollande s'était alliée à l'Angleterre et l'escadre française de Méditerranée n'avait pas eu le temps de faire sa concentration avec les principales forces de la flotte à Brest, sur l'océan Atlantique et les principes (mahaniens) de concentration des forces ne furent pas appliqués par la France. A la bataille de La Hougue, dans la péninsule du Cotentin, tout près de l'Angleterre, à un contre deux, durant douze heures, aucun bateau français ne cessa le feu; mais le lendemain, ils eurent de grandes difficultés pour remonter les courants du Cotentin pour se mettre à l'abri dans leurs ports (Saint Malo ou Brest). Mahan a écrit à propos de la flotte

française: “Aucune aussi haute preuve d’esprit militaire et d’efficacité ne pouvait être donnée par aucune marine” Cet échec n’était cependant pas important et les bateaux perdus furent reconstruits; mais les Colbert n’étaient plus là pour continuer leur politique maritime. Le lobby de l’armée devint plus fort que celui de la Marine et les corsaires prirent la place des flottes classiques (la “guerre de course”).

Ainsi à Midway, la concentration des forces fit aussi défaut. Si les deux porte-avions légers avaient été réunis aux 4 porte-avions lourds, ils auraient ensemble coulé les 3 porte-avions US; mais les porte-avions légers étaient dispersés l’un aux îles Aléoutiennes, l’autre pour protéger la flotte cuirassée menée par le *Yamato*.

En Europe, bien après La Hougue, arriva la Guerre de Succession d’Espagne. L’Europe entière ne voulait pas voir sur le trône d’Espagne qui possédait un empire géant en Amérique, le petit-fils de Louis XIV qui devait régner sous le nom de Philippe V. En 1704, les Anglais prirent Gibraltar au début de la guerre avant de combattre le comte de Toulouse, la flotte anglaise fut épuisée à Malaga par la flotte française, mais Toulouse n’envoya pas une de ses 24 galères capturer un vaisseau ennemi pour examiner ses capacités de combat. Ceux-ci n’avaient plus ni poudre ni boulets et étaient très endommagés. Toulouse ne décida rien et rata sa chance et Gibraltar fut renforcé et réapprovisionné et transformé en forteresse imprenable.

La France laissa tomber la guerre d’escadre et en 1707, la flotte anglaise et une armée piémontaise essayèrent de prendre Toulon par mer et par terre. La même année, eurent lieu deux grandes victoires: l’échec total du siège de Toulon et la victoire d’Amanza qui mit définitivement Philippe V sur le trône d’Espagne. Mais pour la première fois, une flotte anglaise resta en permanence en Méditerranée. La guerre contre l’Europe entière épuisa la France qui souffrit de nombreuses invasions et défaites terrestres. Mais en 1711, l’amiral Duguay Trouin prit possession d’un protectorat anglais en s’emparant de Rio de Janeiro. Cela décida l’Angleterre de faire une paix séparée en 1713; cette victoire navale changea le cours de l’Histoire. La même année une paix générale fut faite et la France garda ses frontières ainsi que la majeure partie de ses colonies, y compris Louisbourg, une grande forteresse protégeant Québec et il y eut une expansion remarquable en Louisiane, de Detroit à La Nouvelle-Orléans qui fut créée en 1719.

La conclusion du règne de Louis XIV fut l'élargissement de la France jusqu'au Rhin et la "frontière de fer" formée par les forteresses de Vauban dans le nord-est. Dans le domaine maritime et colonial, les deux grands empires d'Amérique français et espagnol, étaient liés par le "Pacte de Famille" des Bourbons.

malgré le renforcement de la flotte anglaise.

Il y avait deux types de colonies françaises et anglaises: - l'Amérique: la côte est à l'Angleterre avec 1 million et demi de colons, un grand espace à la France incluant le fleuve Saint Laurent (capitale Québec), les Grands Lacs, la vallée du Mississippi mais seulement 100 000 colons plus les alliés Indiens (par exemple l'armée française à Québec sur 4 000 hommes comptait 1 800 Amérindiens).

- Les Indes: il n'y avait ni esclaves ni colons à cause de la densité de sa population, mais des comptoirs commerciaux et des alliances avec des despotes locaux, appelés plus tard "maharajahs". L'Inde était une énorme réserve de matières premières.

Mais le manque de persistance dans la politique maritime française (fin du règne de Louis XIV, règne de Louis XV, Révolution française) allait finalement entraîner l'hégémonie anglaise sur tous ces territoires et faire d'elle la puissance mondiale du XIXème siècle, jusqu'au moment où les USA, une autre puissance anglo-saxonne, prit la relève (après la Première guerre mondiale).

Géopolitiquement, il était évident que le Japon allait se heurter aux USA dans les années Trente. Normalement cette guerre aurait du être une guerre navale , comme nous l'avons vu. Il aurait pu se contenter , après une paix avec Tchang Kaï-Tchek, en 1940, de mandats sur l'Indochine française et l'Indoésie. Dans ces deux cas, tout son effort aurait pu être un effort naval (la guerre de Chine coutait le double des porte-avions) et si les Anglo-Saxons, qui tenaient la Malaisie et les Philippines, n'avaient pas supporté une présence japonaise en Indonésie, c'est eux qui auraient été contraints de déclarer la guerre, position inconfortable pour l'opinion publique américaine.

4) Le Mahanisme sous Mahan et dans la période contemporaine

Le vaisseau à voile fut supplanté à partir de 1860 par le navire cuirassé à vapeur avec des obus explosifs et une protection en acier

Tsushima fut la première grande bataille entre cuirassés bien après l'invention de ce dernier. Mahan avait prévu la victoire japonaise et sentit le challenge pour les USA quand il publia en 1900 : "The Problem of Asia and its effects upon International

Policy”.

Mahan vit la construction par Lord Fisher du premier cuirassé moderne *le Dreadnought*, accompagné de croiseurs de bataille plus rapides et moins protégés. Le *Dreadnought* tirait des leçons de la bataille de Tsushima. Ce type de navire trouvera son apogée dans le *Yamato*.

D: Dreadnought

CB: Croiseurs de bataille

1917				
Japon	Gde Bretagne	Allemagne	USA	France
?	28 D, 10 CB	16 D, 5 CB	17 D	5 D
1940				
10 D	15 D	2 CB	15 D	6 D

Le développement des flottes est ici montré après le sabordage de la Hochseeflotte allemande et l'apparition de la Marine japonaise. Cet effort japonais est très important; il tourne le Traité de Washington (1922) qui donnait la proportion 5 pour les Anglo-Saxons, 3 pour les Japonais et 2 pour la France.

Nous pouvons voir dans le tableau ci dessus que l'US Navy a égalisé la Royal Navy en nombre de cuirassés, Mais USA, Japon, Grande Bretagne ont aussi chacun dix porte-avions, type de navire qui détronera le cuirassé, fait que Mahan n'a pas vu mais qu'il aurait compris et accepté. En effet pour lui, il n'y a qu'un Seul "capital-ship" pour chaque période, un "roi de la mer", le bateau le plus puissant de son époque, et les leçons de Grandes Guerres de Louis XIV, Louis XVI et Nelson sont les mêmes que celles qu'on peut tirer des cuirassés, des dreadnoughts ou des porte-avions. Les bateaux changent mais les principes sont les mêmes:

- 1) Concentration des forces
- 2) Destruction du la force organisée de l'ennemi
- 3) Création de bases industrialisées avec un hinterland peuplé.

Mahan est contre la "Jeune Ecole", à l'origine des théories allemandes et russes, parce que les petits torpilleurs (devenus depuis l'ancêtre du sous-marin d'un point de

vue tactique) peuvent être coulés par les “contre-torpilleurs” (“destroyers”) et ces derniers peuvent être aussi utiles pour escorter les porte-avions contre les sous-marins. Par contre il aurait admiré les deux Yamato et les deux Shinano si ces derniers étaient devenus des porte-avions. De tels couples auraient été, selon ses théories, les maîtres de la mer s'ils avaient eu de bons pilotes et une protection de destroyers anti-aériens et anti-sous-marins.

Selon lui, les USA pouvaient succéder à la première puissance anglo-saxonne naturellement sans conflit, ce qui est arrivé et a contenu la puissance japonaise naissante.

Le développement des lignes de la PanAmerican Airways, d'abord Miami-Cuba (devenu une colonie US quand elle fut prise aux Espagnols) puis vers les autres Caraïbes, ces dernières devenant une Méditerranée US, leur permit ensuite, grâce au canal de Panama de passer leurs flottes vers le Pacifique

Mais l'impérialisme US dans le Pacifique n'avait pas encore de bases si bien que la PanAm s'engagea, dans les années Trente, dans une autre “nouvelle frontière”: la conquête du Pacifique grâce au “China Clipper” et autres grands hydravions du même type. Los Angeles et Hong Kong furent choisis comme terminus d'une ligne qui passait par Hawaï (Pearl Harbor), Midway, Wake, Guam, Manille et finalement Hong Kong. Ces escales indiquent les lieux des batailles à venir!

Mahan envisageait les USA comme une île, comme la Grande Bretagne et le Japon, et pensait qu'il était suffisant de contrôler le Mexique sans trouble. A la différence de l'époque de l'intervention terrestre japonaise en Chine, il n'y avait pas aux USA un lobby de l'Armée de terre. La meilleure preuve est que Mac Arthur, le plus mahanien des officiers généraux US, de 1941 à 45, commandait en chef les opérations navales et dirigeait en fait l'amiral Nimitz.

A côté des Anglo-Saxons qui adoptèrent la doctrine de Mahan et des Français qui firent une brillante synthèse de la “Jeune Ecole” et de mahanisme (Amiral Castex) car ils ne pouvaient pas, pour des raisons industrielles être seulement mahanien, Les Japonais se trouvèrent sans stratégie navale et n'avaient que leur seule tradition de samouraïs datant de la période féodale.

C'est sur les plages et non en mer qu'ils battirent les Mongoles et les Coréens, c'est pour défendre le Japon que le grand Tojo attendit les Russes à Tsushima au lieu d'aller

les couler quand ils passèrent Singapour (parce que les Russes auraient pu prendre un autre chemin, celui longeant le Japon sur la côte Pacifique pour aller à Vladivostok). Nous citons quelque exemples d'une constante. La Marine japonaise soutint essentiellement l'armée de terre au lieu de "détruire les forces organisées de l'ennemi".

La Seconde Guerre mondiale montre aussi clairement ce fait, le plus souvent, les opérations navales japonaises eurent lieu pour soutenir des débarquements terrestres ou se défendre de débarquements américains.

Pour conclure, de nos jours, grâce à sa puissance maritime civile et militaire, dans le cadre d'une autre règle du jeu à laquelle il s'est adapté, le Japon semble avoir réalisé nombre des objectifs qui furent les siens lors des années impériales, en cela il est devenu mahanien.

— 1997.7.29受稿 —